

■特集■ぜひ読みたい短歌の本

現代短歌全集全十七巻に挑む

横山未来子

「現代短歌全集全十七巻に挑む」というタイトルを与えられたが、まさに現在挑んでいるところである。仲間で月に一度開いている読書会で、十数年前からこの『現代短歌全集』をテキストにしている。時には新刊歌集を読むこともあるが、基本的には『現代短歌全集』から毎月一、二冊の歌集

を読んで、十首選を持ち寄ることになっている。現時点で第十二巻の約半分まで読み終えたので、ほぼ一年に一卷のペースと言えるだろうか。

『増補版現代短歌全集全十七巻』は、出版元の筑摩書房のHPによると「在庫なし」になっている。私も十数年前には一冊ずつ書店で注文していたのだが、途中から品切れになってしまい、買えなかつた分は図書館で借りて読んでいる。市や大学の大きな図書館には大抵揃っているようである。各巻には、十五冊から二十冊ほどの同時代の歌集がおさめられており、歌集はすべ

て初版の完本で、序文やあとがき、挿絵や小さな書影も付いていて当時の雰囲気も伝えている。巻末には詳細な解説・解題も掲載されており、内容が盛り沢山だけに活字は小さく、一ページに三段組みと、かなり読みごたえがある。

各時代を代表するような歌集が選ばれているのはもちろんのだが、それほど著名ではないが歌壇史の中で独特な位置を占めたと思われる歌集も選ばれている。正直に言うと、ひとりで読んでいたら「名前を知らない歌人だから……」とスルーしてしまいそうな歌集もある。それだけに、漏れなくすべてを読むことによつて何か見えて来るものがあるのでは、とも感じている。

では、特徴的な巻を挙げて少し詳しく見てゆきたい。

◇第一巻……明治四十二年以前
『東西南北』『紫』と謝野鉄幹、『みだれ髪』鳳晶子、『思草』佐佐木信綱、『銀鈴』尾上

柴舟、『竹の里歌』正岡子規、『まひる野』窪田空穂、『池塘集』青山霞村、『海の声』若山牧水など。

和歌革新運動以後の歌集が並ぶ。晶子は単独歌集の他にも山川登美子らとの共著『恋衣』も収録されており、この時期の「明星」の隆盛がうかがえる。また、信綱・子規・牧水のそれぞれの個性の表出、最初の口語歌集である青山霞村『池塘集』の斬新さなども見どころである。

◇第二巻……明治四十三年～大正二年
『独り歌へる』若山牧水、『収穫』前田夕暮、『酒ほがひ』吉井勇、『一握の砂』石川啄木、『新月』佐佐木信綱、『桐の花』北原白秋、『赤光』斎藤茂吉など。

「明星」の廃刊、「アララギ」の創刊などを経た激動の時代。夕暮・牧水の活躍、信綱の自由な作風への転換、茂吉・白秋の鮮烈な登場などが印象深い。この後数巻は、島木赤彦・長塚節・伊藤左千夫ら「アララ